

論文の和文要旨

論文題目

見ることの詩学
—ボードレール『小散文詩』における視覚の問題—

氏名

陶山 大 一 郎

一九世紀フランスの詩人シャルル・ボードレール（1821-1867年）が晩年の約十年の間に制作した50にのぼる散文詩篇は、彼の死後、『小散文詩 *Petits poèmes en prose*』（『パリの憂鬱 *Le Spleen de Paris*』）と題してまとめられた。詩集としての未完成という性格ゆえに、そこに収められたテキストは読者に対し容易に統一的な読みを許さないものと見える。しかしながら、そこにはいくつかの詩篇に共通する主要な主題が垣間見えることも確かであり、本論文ではそのような主題のうち、晩年のボードレールの美学・詩学にとり特に重要なものの一つと考えられる視覚の問題系を、幾篇かの散文詩を読み解いて論じてゆくこととする。

もちろん、ボードレール自身が卓越した美術批評家であった以上、彼の詩と造形芸術作品との影響関係や、特定のイメージへの詩人の個人的な嗜好を論じることが自然な読解作業と思われよう。しかし本論文では、まずもってテキストを丹念に読み進め、その内部でどのように視覚的な要素が組織・編成され、読者へと提示されているのかを問う。したがって、分析は主に語り手の〈見る〉行為、彼の眼差しの様態などを中心にしたものとなる。このようにテキストにおいて現れている〈見る〉経験のさまざまな構造を問うことから、『悪の華』以後の、後期ボードレールの美学的考察、とりわけ「現代生活の画家」(*Le Peintre de la vie moderne*, 1863年)にも通底する思考を浮き彫りにすること、それが本論文の目的となる。

まず第一章「タブローとしての詩」では、詩作行為における視覚の重要性を確認するために、『小散文詩』のうちでも短い部類に入る「窓」(« *Les Fenêtres* »)に焦点を当てて考察を進める。詩作行為それ自体を主題としている一種のメタ・ポエムと捉えられるこの詩では、他者の姿を見ることが物語を生み出すこととの関係が前景化されており、したがって現代生活における詩人の主体性そのものが視

覚レベルで問題となっている。

この章ではまずジャン・スタロバンスキーの論考に依拠しつつ、ルソーのテキストとの対比から、都市における観察がボードレールの詩作行為において不可分なものとなっているさまを確認した後に、その観察の様態に関しての議論に入る。従来、この詩に対する解釈では、語り手＝詩人の自己中心的な視線ばかりが指摘されてきたが、本論文ではテキストで真に賭けられている問題性として、詩の最後に表されている、詩作行為を通じた自己認識の仕組みを明らかにすることを主眼とする。

その際に、題名ともなっている〈窓〉という形象が、いわば他者のイメージを枠づけ、タブロー化するものとして機能しており、またそのような作用を施すことで、表象の空間と、それを観賞する主体の位置する現実の空間との緊張関係を引き起こすものとなっている点を重視する。この論点に関しては、マラルメやゲオルク・ジンメル、金田晋などによる、美術作品の〈額縁＝枠づけ〉をめぐる議論を参照しつつ、一方では後期ボードレールの美学でとりわけ重要となる、イメージの様相面における拡張化、つまり喚起作用という問題を明確にすると同時に、もう一方ではそのように他者の視像化、そして物語化を設定することが、見る者の定位を逆に可能にするものとなっている過程を確認する。他者を〈見る〉こと、そしてそこから生じる物語を詩として〈語る〉ことによって、詩を制作する側の自己認識がもたらされるという再帰的な経験の構造が、この短い作品のうちに読み取れるものと考えられるのである。

続く第二章「眼差しの恣意、諸芸術の交錯」では、散文詩「貧しい者たちの眼」(« Les Yeux des pauvres ») を主な対象として論じる。ここではまず、詩の内容に沿ったかたちで、視線を介した意思疎通の問題に焦点を合わせることで、登場人物間において視覚を介した反射的な照応関係に綻びが生じている点を明らかにするが、これは第一章で参照したスタロバンスキーの言葉に倣って言えば、都市という環境が強いる「非＝関係 non-relation」、つまり視線のうえでの恣意性という問題に集約されるものと捉えられる。ここから視覚的なレベルで顕在化するコミュニケーションの危機という事態が、テキストで主題化されていることをまず確認している。

つぎにこの恣意性が、詩の内部だけでなく、読み手も射程に収めるものであることを明らかとするために、詩の構成から類推されるタブローないしはイメージの並置化という問題へと考察を進める。その際、ボードレールの美術批評においてイメージの提示の様態をめぐってなされた、詩・絵画・彫刻といった芸術ジャンルの比較・差異化に関する言及を参照することが有効と考えられる。とりわけ「1846年のサロン」と「1859年のサロン」における彫刻作品への評価の変遷を手がかりとすることで、この詩において、主題としての視線の恣意性と、視覚像を並置化する構造から、諸々のイメージを統合するという読者の側での反省的経験が、暗に問題とされている点が析出される。つまり、詩の読み手の位置づけに対しても、反射的な照応関係に基づくものとは異なる読解の作業が要請されてい

ることが明らかとなるのである。

以上の二つの章が、ボードレールの散文詩における視覚性の、いわば核となる側面を扱ったものであるのに対し、続く二つの章では考察の進め方を変えてゆく。前二章がそれぞれ一篇の詩を中心に展開されたのに対し、これ以降の章では副次的な主題をなしている一連の詩篇を読解するかたちをとる。そして、複数の散文詩が視覚レベルにおいて緊密な関係を結ぶものであること、さらに個々の結びつきのうちに彼の詩学における独特の思考の線が描かれていることを明らかにしてゆく。

第三章「表象行為の視覚的寓話」では、見ることや像を描くことと、そこに同時に働くある種の力との関連を表した三つの詩、「描きたい欲望」(« Le Désir de peindre »)、「情婦たちの肖像」(« Portraits de maîtresses »)、そして「粋な射撃家」(« Le Galant tireur »)を取り上げる。この3つの作品では、それぞれ視線に内在する暴力性を扱った逸話が、変奏されつつ語られているが、そこで表される〈見る者〉と〈見られる者〉との間の不均衡な関係は、いずれもが〈暴力〉の極限としての〈死〉へと至るものであることがまず確認される。

したがって、これらの詩は〈見る〉ことに内在する〈死〉の契機を扱った、一種のセリーのごとく捉えられるのだが、詩の具体的な内容から少し距離を取ってみると、この視覚と〈暴力〉にまつわる主題（さらに「粋な射撃家」においてはこれに加えて〈盲目性〉という主題が挙げられる）が、〈見た〉ものを〈記憶〉し、その〈表象＝再現前化 *représentation*〉をおこなう行為の、いわば寓話をなしている可能性が生じる。つまり、見る主体の〈死〉や、見られる者の〈死〉という事態は、記憶と表象に内在するある問題性を指し示したもののなかではないか、と考えられるのである。

そこで、これらの作品の発表に先行する時期である1850年代後半から60年代初めまでに執筆された重要な批評文、「1859年のサロン」(*Salon de 1859*)と「現代生活の画家」から、記憶と表象＝再現前化をめぐるボードレールの言及および実践を参照しつつ考察をすすめることで、対象となっている散文詩群と後期ボードレールの美学との結びつきを確かめるとともに、「現代生活の画家」においてコンスタンタン・ギースの制作手法から抽出された〈現代性 *modernité*〉の概念のうちに含まれている問題のいくつかを、確定する作業をおこなう。

そして第四章「傍観者とその語り」では、〈子供〉という形象を扱った散文詩のうち、「貧しい者の玩具」(« Le Joujou du pauvre »)、「菓子」(« Le Gâteau »)、そして「天職」(« Les Vocations »)の3篇を読解の対象とする。この副次的な主題の設定は、「現代生活の画家」第三章で、都市の遊歩者として観察するギースが、〈子供〉としての芸術家として定義されているという事実に起因する。つまり、〈見ること〉に没入した状態の比喩としての〈子供〉という形象自体が、いかに見られ、語られているのか、ということを確認することによって、散文詩を

制作していた頃のボードレールの美学的な思考を浮き彫りにすることがまず目的となるのである。

だがこのことはまた、〈見ること〉だけではなく、同時に詩の〈見させる donner à voir〉機能、つまり視覚的な〈贈与〉という側面をも考察の射程に収めるものである。じっさいに最初の二つの詩では、凝視する子供たちに対する贈与の行為が描出されるとともに、それを読み手へと提示する次元も問題となっているのであり、また「天職」に関しても、明確には〈贈与〉の問題は提示されてはいないが、登場人物である四人の子供が彼らの提示する逸話における対象と取り結ぶ関係、そしてこの四人の子供たちに対して彼らを観察の対象としている語り手が取り結ぶ関係という、視線を介した二重の観察と提示の行為が描出されている。

これらの作品では、一見するところ語り手は中立的な傍観者として振る舞っているように見えるが、以上のような〈視覚的贈与〉という論点を中心にその語りを検討することで、そこでは読み手に対しても何らかの作用を行使するという側面が見受けられる点が確かめられる。それは、けっして一様なものと定義ことはできないが、やはり第二章で論じたことと関連する、読み手のうちでの反省的経験を促す作用であると言える。

以上のように具体的な散文詩群の読解を実践することで、散文詩における視覚の問題系が後期ボードレールの芸術的思考において有する位置とその重要性が明らかとなるであろう。